エイズ相談利用の利益性と障がい性認知に関する研究

エイズ検査の受検経験による違い

○飯田敏晴

(山梨英和大学人間文化学部)

キーワード: HIV/AIDS 予防, 利益性と障がい性認知,

Perceived Barriers/Benefits of Voluntary Counseling and Testing for HIV/AIDS: With Special Reference to Experience

Toshiharu IIDA

(Department of Humanities, Yamanashi Eiwa College)

Key Words: HIV/AIDS prevention, Perceived Barriers/Benefits

目 的

本研究は, HIV/AIDS 予防をより実現していくために, エイズ相談・検査の利用行動に着目し, その規定要因として「エイズ相談利用の利益性・障がい性認知」の概念化および尺度作成を目的としたパイロットスタディである。

方 法

調査対象者: クロスマーケティング社が保有するマスターサンプルのうち, 600 名 (性別: 男性 302 名, 女性 296 名, その他 2 名, 平均年齢: 46.13(SD=12.97) 歳) である。手続き: WEB 式調査である。20 代から 60 代の年齢層にある成人男女を調査の対象とした。調査会社の調査協力依頼に応じた者の年齢層が各世代で均一になるように目標数を設定した。質問内容: 1) フェイスシート 性別 (男性・女性・その他), 年齢。2) エイズ検査の受検経験の有無, 3) エイズ相談利用の利益性と障がい性認知 飯田 (2015) が, 永井・新井 (2008) における自由記述文収集のための教示文を「HIV/AIDS に関することで悩んだり, 困ったりしたとして」という内容に変更して, 電話相談機関, 保健所, 医療機関といった各種専門機関に相談する (以下, エイズ相談) 際に, 相談して「よいこと」「よかったと思うこと」, 障がい性認知は, 相談して「悪いこと」「相談しなければよかったと思うことはどんなことであると思いますか」を尋ねた。分析計画: 飯田 (2015) の「エイズ相談利用の利益性・障害性認知」の分類カテゴリーをもとに作成した分類基準を使用した。自由記述の分類は, 心理学を専門とする修士課程修了者および発表者が別々に分類した。分類結果で両者が異なった場合には, 別の分析補助者に見せて分類してもらった。なお, この分類マニュアルに基づいた分類方法は, 2 名の評定者間の一致率は, $\kappa=.83-.90$ であった (飯田, 2015)。

結 果

1. 分析対象となった者の属性

調査対象者 600 名から得られた回答のうち, 「利益性認知」の質問項目に回答した者 539 名 (男性 267 名, 女性 270 名, その他 2 名, 平均年齢 46.53 歳 (SD=12.88 歳)), エイズ検査の受検経験者は 57 名 (10.58%), 「障がい性認知」の質問項目に回答した者 536 名 (男性 247 名, 女性 288 名, そのほか 1 名, 平均年齢 46.61 歳 (SD=12.83 歳)), エイズ検査の受検経験者は 57 名 (10.63%) の分の自由記述文を分析対象とした。

2. 自由記述の分類結果

自由記述は意味内容に基づいて, 利益性認知が 615, 障がい性認知が 548 の記述文に分けられた。それを分類した。以下, 『』内の概念名は大カテゴリー名で, 「」内の概念名は小カテゴリー名であり, 数値は分類された記述文の数である。**利益性認知** 『情報や対処法獲得への期待』では, 「正しい知識の獲得」で 67 (10.9%), 「感染の確認」で 104 (16.9%), 「専

門的援助の獲得」で 24 (3.9%), 「対処法の獲得」で 45 (7.3%) であった。『専門家相談への安心感』では, 「プライバシーの保護」で 16 (2.6%), 「安心感」で 106 (17.2%), 「相談者への信頼感」で 15 (2.4%) であった。『二次感染の予防』では 18 (2.9%), 『物理的利便性』では「無料さ」「気軽さ」「時間のコストがない」のいずれにおいても 2 (0.3%) であった。そのほか「無い」が 160 (26.0%), 「わからない」が 54 (8.8%) であった。

障がい性認知 『開放することへの抵抗感』では「自己開示の負担」で 26 (4.7%), 「恥ずかしい」で 10 (1.8%), 「相談することへの心理的抵抗」で 4 (0.7%), 「時間的問題」で 2 (0.4%) であった。『エイズ恐怖』では, 「知識獲得による不安の助長」で 9 (1.6%), 「結果への不安」で 62 (11.3%), 「不合理な心配」で 1 (0.2%) であった。『汚名への心配』では「他者へ知られることへの恐れ」で 81 (14.8%), 「偏見の懸念」で 12 (2.2%), 「相談相手に知られることへの懸念」で 7 (1.3%), 「相談者の反応への懸念」で 4 (0.7%), 「パートナーの反応への懸念」で 1 (0.2%) であった。『相談者への不信任感』では 23 (4.2%) であった (小カテゴリーとなる概念名は無い)。そのほか「特になし」で 262 (47.8%), 「わからない」で 44 (8.0%) であった。

3. エイズ検査の受検経験の有無による回答頻度の違い

「エイズ相談利用の利益性と障がい性認知」の各カテゴリーにおける回答頻度について, エイズ検査の受検有無による差が見られるかどうかを検討するために, χ^2 検定を用いた検討を行った。その結果, 利益性認知においては, 受検経験者が未受検者よりも「正しい知識の獲得」や「感染の確認」を高い頻度回答していた ($p<.05$)。一方で, 障がい性認知においては, すべてのカテゴリーで差は見られなかった。

考 察

WEB 調査から, 成人における「エイズ相談利用の利益性と障がい性認知」の実態が明らかとなった。さらにエイズ検査の受検の有無による回答頻度の違いの検討によって, 受検経験者が未受検者よりも「正しい知識」や「感染の確認」が高い頻度で回答していた。このことは, 受検経験がエイズ相談利用の利益性認知に影響を与える可能性を示すものである。インターネット等の他の情報メディアから得られた情報ではなく, 実際にエイズ相談を利用することによって, 誤った知識が是正されやすいこと, さらに, 「HIV 感染の確認」という本来認知しやすいことを利益として認知しやすくなる可能性があると考えられる。

引用文献

飯田敏晴・佐柳信男 (2014) エイズ相談・検査利用の利益性と障害性の認知に関する質的分析: 自由記述式調査による探索的検討 山梨英和大学紀要 **13**, 45-62.
飯田敏晴 (2015) エイズ相談の利益性・障がい性認知に関する研究: 利用者調査から 日本健康心理学会第 28 回大会. (本研究は, JSPS KAKENHI 50637923 の補助を受けた。)